

研究課題

情報活用能力を身につけたグローバル社会に対応できる人材の育成

副題

～SNSとタブレット端末を活用した授業と家庭学習の連携を通して～

キーワード

情報活用能力 グローバル人材 タブレット端末 SNS 家庭学習

学校名

高森町立高森中央小学校

所在地

〒869-1602
熊本県阿蘇郡高森町高森1100

ホームページ
アドレス

<http://es.higo.ed.jp/takamoes/>

1. 研究の背景

(1) 今日的な教育の課題

高度情報化社会が進展し、学校においても電子黒板やタブレット端末等の ICT 環境が整備されるようになった。また、インターネットの普及により、誰もが、いつでも、どこでも情報に触れ、情報を発信することができるようになり、児童を取り巻く環境の変化は今後も加速度的に進んでいくと思われる。そのような時代が到来する中で児童生徒が身に付けるべき能力として、情報活用能力育成が挙げられる。文部科学省が策定した教育の情報化ビジョンでは、情報活用能力の育成について「必要な情報を主体的に収集・判断・処理・編集・創造・表現し、発信・伝達できる能力等を育むこと」と示され、「生きる力の育成に資するものである」としており、変化していくグローバル化した社会においてその育成は重要である。

また、平成 22 年 10 月の「教育の情報化に関する手引」をはじめ、平成 25 年 6 月に閣議決定された「第 2 期教育振興基本計画」においても、ICT を活用した授業改善が求められている。ICT 等を活用した新たな学びの創造は、「自立・協働・創造に向けた一人一人の主体的な学び」を実現する上で重要な教育課題であると考ええる。

(2) ICT 教育活用の重要性から

第 2 期教育振興基本計画や現行学習指導要領等においても、ICT を活用した授業づくりの重要性は高まってきた。時間的・空間的制約を超え、双方向性をした、ICT の特長は一斉授業による学びだけでなく、子どもたちの一人一人の能力や特性に応じた学びや子どもたちどうしが教え合い学び合う協働的な学びを実現していくにつながる。学校現場における ICT の整備状況が進んでいく中で、教師自身が授業改善の立場に立ち、授業をデザインしていくかが問われている。

また、本校は現在、特別教室を含むすべての教室に電子黒板、実物投影機が整備されている。また、段階的に教師用デジタ教科書、タブレット端末（現在およそ 200 台）、無線 LAN 環境（校内全域 wifi 環境）が整っており、活用が進んできている。特に電子黒板及び実物投影機の使用は、全校でかなり定着してきた。反面、タブレット端末の活用がなかなか進んでいないことが課題として挙げられる。更に、ICT を活用した授

業改善が進む中で、家庭学習は依然としてドリル学習が中心であり、主体的に取り組む児童は少ない。授業と家庭学習の連携させる取組についても必要性が感じられる。道徳や特別活動を中心とした情報モラル教育も行っているが、安全性（影の部分）ばかりが強調され、児童の将来の活用につながる実践的なものになっていないことも大きな課題である。

(3) 児童の実態及びこれまでの研究から

高森町は山間部に位置し、人的交流が乏しい。そのため、人を育てる教育の充実が町の重要施策の一つであり、その成果に対する期待は大きい。上記にもあるように平成 24 年に、特別教室を含む全ての教室に電子黒板と実物投影機を整備された。同時にデジタル教科書やタブレット端末 200 台（一人一台のタブレット端末）も整備され、持ち帰りが可能な環境にある。また、無線 LAN アクセスポイントを段階的に設置し、校内全域の wifi 環境が整っている。

さらに、熊本県教育委員会指定として、過去 5 年間毎年研究発表会を継続して開催し、教育の情報化推進の全国優良校として表彰されるなど、授業での ICT 活用で一定の成果を公開した。児童の ICT 活用スキル等が向上した一方で、情報を整理・活用したり、発信したりする能力の育成を引き続き展開する予定である。

2. 研究の目的

以上のことから本校では授業改善の視点に立ち、ICT を活用した新たな授業デザインを検討する。特に、授業や家庭学習に SNS を積極的に活用したり、タブレット端末持ち帰りを行ったりすることで、児童はその有用性を感じながら情報活用能力を主体的に身に付けていくことができるのではないかと考えた。

3. 研究の経過

本研究における経過を以下の表にまとめた。

月	内容・方法（ICT 活用なども含めて）
4	<ul style="list-style-type: none"> ○年間研究計画立案 ○教員の ICT 活用指導力チェックリスト調査及び意識調査（第 1 次） ○児童向け及び保護者向け意識調査（第 1 次） ○有識者招聘による校内研修
5 6	<ul style="list-style-type: none"> ○授業実践を行う単元・教材の選定・検討 ○学習指導案作成及び検証授業・効果検証 ・第 3 学年～第 6 学年まで各学年 2 単元実施
7 8	<ul style="list-style-type: none"> ○研究過程についての学校ホームページによる情報発信
9	<ul style="list-style-type: none"> ○学習指導案作成及び検証授業・効果検証 ・第 3 学年～第 6 学年まで各学年 2 単元実施 ○教員の ICT 活用指導力チェックリスト調査及び意識調査（第 2 次） ○児童向け及び保護者向け意識調査（第 2 次）
10	<ul style="list-style-type: none"> ○第 42 回全日本教育工学研究協議会全国大会（佐賀大会 H28. 10. 14～15）

11	○研究の評価及び研究紀要作成
12	○高森町 ICT 活用セミナー研究発表
1	○学習指導案作成及び検証授業・効果検証
2	・第3学年～第6学年まで各学年2単元実施
3	○研究成果についての学校ホームページによる情報発信
	○研究紀要作成及び研究のまとめと次年度へ向けての準備

4. 代表的な実践

(1) 検証授業の実施

本研究は第3学年から第6学年まで計24単元で実施した。社会科を中心に、国語科・総合的な学習の時間の授業において、教師が情報活用能力を育成する視点に立って授業の構築を図った。以下に実施単元一覧表を示す。

【検証授業実施単元一覧表】

No.	学年	教科・領域	単元名
1	3	社会	わたしのまち みんなのまち (町の様子)
2	3	国語	気になる記号
3	3	社会	かわってきた人々の暮らし (古い道具と昔の暮らし)
4	3	総学	私たちの町をもっと知ろう
5	4	社会	暮らしを守る
6	4	社会	ごみのしよりと利用
7	4	社会	わたしたちの県
8	4	総学	自然にやさしい町 (草原学習)
9	5	社会	わたしたちの生活と食料生産
10	5	社会	わたしたちの生活と工業生産
11	5	社会	情報化した社会とわたしたちの生活
12	5	総学	稲の成長を見守ろう
13	5	総学	環境学習 (水俣から考える)
14	5	国語	きいて、きいて、きいてみよう
15	5	国語	明日をつくるわたしたち
16	6	社会	日本の歴史 (縄文のむらから古墳のくにへ)
17	6	社会	日本の歴史 (3人の武将と天下統一)
18	6	社会	日本の歴史 (長く続いた戦争と人々の暮らし)
19	6	社会	わたしたちの生活と政治
20	6	社会	世界の中の日本
21	6	総学	平和学習 (前編: 過去、日本に起こったこととは)
22	6	総学	平和学習 (後編: 今、日本は平和なのか)
23	6	国語	ようこそ、私たちの町へ
24	6	国語	未来がよりよくあるために

(2) タブレット端末持ち帰りや地域への携帯

ア 情報収集から課題づくり：タブレット端末の地域への携帯

3年生国語科「気になる記号」では、図1のように児童が町探検の際にタブレット端末を地域へ携帯、気になる記号を撮影させた。その後、撮影した記号を図書で調べ、図2のようにクラスで紹介させた。自分で見つけてきたものを画像で紹介できることへの喜びは、学習意欲につながっていた。また、3年生の発達段階では、タブレット端末の操作技能が定着していない児童もいたが、撮影機能などシンプルな活用を心がけたことで、積極的な活用につながった。身近な地域から学習課題を見つけたことで意欲的な学び合いの姿が見られた。

イ 学習内容の定着：SNSによる情報共有

6年生社会科「縄文のむらから古墳のくにへ」では、小單元ごとに学習内容を整理するために、図3のようなレポート作成を行った。教育用 SNS を介して児童に課題や資料写真を配布した。児童はその課題を確認後、提供された資料写真を活用しながらレポートを作成、再び教育用 SNS を介して提出させた。

教育用 SNS を活用することで、レポートの情報を共有することができ、まとめ方が分からない児童や学習内容の定着が不十分な児童は、友達のレポートを参考に作成することができた。また、図5のように出来上がったレポートに対してコメントを返す活動を行った。当初は何をコメントすればよいのかが分からない様子やレポートの形式に対するコ

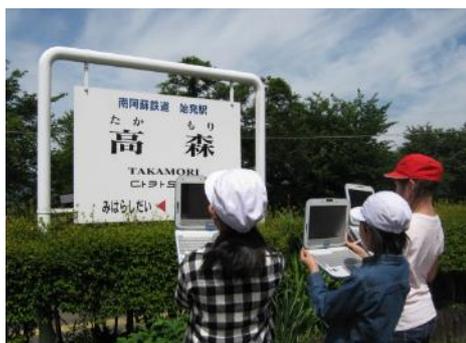


図1 地域への携帯の様子（3年）

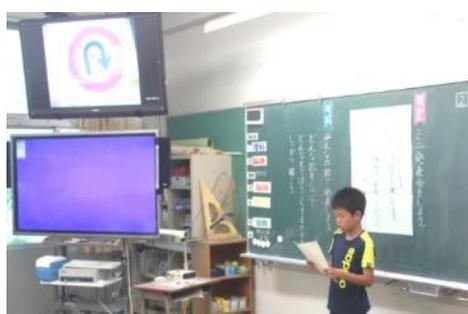


図2 発表する様子（3年）

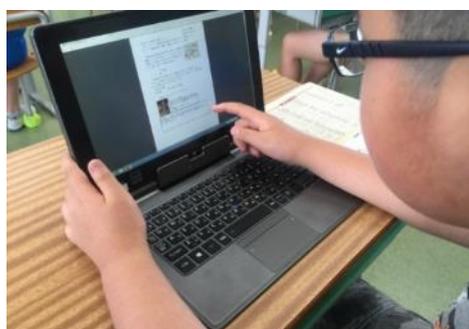


図3 レポート作成の様子（6年）

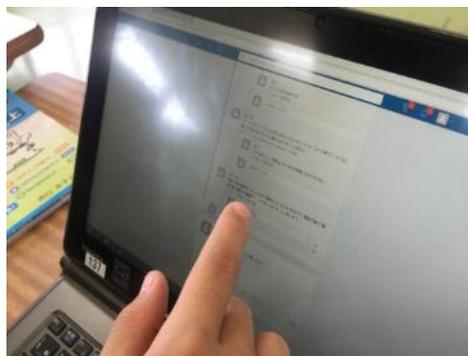


図4 SNSに記入する様子（6年）

メントが多く見られたが、次第に内容に関するコメントが増え、そのコメントを受けて自分のレポートを改善していくことができるようになった。キーボード入力のスキルはもとより、レポート作成の技術、写真を加工する技術なども身につけることができた。また、SNS 上で相手を気づかう言葉かけや励ましの言葉もコメントするようになった。実践を通して情報モラルについて考えていく児童が増えてきたことがわかった。

ウ 家庭学習での学び合い

小学校6年生社会科の歴史学習では、事前に家庭で資料を分析しておき、実際の授業での学び合いの充実を図った。図6のように次時の授業内容に関する複数枚の資料をSNS上にアップし、友達とのやり取りを行いながら分析をさせるようにした。分析した結果をもとに翌日の授業では図7のような活発な話し合いが行われた。事前に問題点を家庭で、SNSを利用しながら分析していたため、話し合いもより広い視野に立ったものになり、深い学びへとつながっていった。

エ 動画を共有し考え方を振り返る

5年生社会科「わたしたちの生活と食糧生産」では、家庭の消費行動についてインタビュー調査を行い、それをSNS上で共有させた。単元の導入では課題作りに活用し、単元の終末で自分の考えと照らし合わせて考えを深める活動に活用した。また、図8のように友達への投稿した動画を視聴し、消費者の考え方には様々な考え方があることに気づかせることができた。



図5 SNSでの交流の様子(6年)



図6 家庭での資料分析(6年)



図7 学び合う様子(6年)



図8 動画視聴の様子(6年)

（３）道徳や特別活動での情報モラル教育

図9は6年生の学級会の様子である。児童は SNS を活用して情報共有を行いながら、自分たちの主張をプレゼンテーションにまとめ、発表することができた。SNS 上では、資料の選択、発表の役割分担等が議論され、学級会当日の活発な意見交換につながった。また、プレゼンテーション作成段階では著作権に注意する様子や、友達に対する言葉のかけ方を考える姿が多く見られ、より実践的な情報モラルの意識の高まりを感じることができた。



図9 学級会の様子（6年）

（４）外部講師の指導及び評価

校内研修に外部講師として鹿児島大学の山本朋弘先生をお招きし、授業改善のご指導・ご助言、研究の方向性、教育の情報化等に関する最新情報などをお話いただいた。初任者や若手教員だけでなく、すべての職員にとって有意義な研修となった（図10）。



図10 外部講師による評価

5. 研究の成果

- 学習場面に応じて SNS を活用したり、タブレット端末持ち帰りや地域への携帯を行ったりすることで、課題の発見・整理、意見交換が容易になり、学び合いの活性化につながった。
- 実施状況等を SNS によって学習班ごとに共有することで、各家庭が距離的に離れた状況下でも児童同士の学び合いを展開させることができた。
- タブレット端末や SNS の日常的な活用は、実践的な情報モラル教育につながり、児童の意識を高めることができた。

6. 今後の課題・展望

社会科を中心と実践となったが、さらに他教科他領域での実践においても同様の結果が得られるのか検証する必要がある。また、情報活用能力の育成は一時的な実践では身につかないと考える。今後も継続的な研究を重ねながら児童の実態に即した研究を進めていく必要がある。

7. おわりに

本実践を本校のみならず県内外に広く発信していくことで教育の情報化に少しでも寄与できればと考えております。これまでご指導いただいた有識者の先生方に感謝申し上げます。